講義年月日：２００６年１０月１６日（月）
講演者：田邊　稔　氏　　（慶應義塾大学メディアセンター本部システム担当）
テーマ：＜Ｌｉｂｒａｒｉａｎ　２．０を目指して＞

講義内容

１．ＫＯＳＭＯＳ紹介（経緯）
　ＫＯＳＭＯＳⅠ富士通ＩＬＩＳベースからＫＯＳＭＯＳⅡ丸善ＣＡＬＩＳベースへ

２．図書館を取り巻く環境の変化
　２４時間３６５日サービス　見える、やさしく、わかりやすく　紙から電子へ　標準化、オープン化、コミュニティ化　出版社、書店などの破綻　予算削減の加速

３．ＩＴ・システム環境の変化
　セキュリテイの脅威　開発スピード　ニーズの多様化、複雑化　オープンインターフェイス　オープンソース　ＷＥＢ２．０時代の到来

４．ＷＥＢ２.０が図書館にもたらすもの
　多様化、高度化するユーザー　Google 的サービスの脅威　図書館に人が来なくなる　図書館員が不要　図書館の変革が必要

５．ＷＥＢ２.０の構成要素と代表的サービス　ー７つの視点ー
　Folksonomy　Rich User Experience　User as Contributor　Long Tail　Participation　Radical Trust　Radical Decentralization

６．ＷＥＢ２.０の定義と技術
　明確な定義はないがＷｅｂ活用のための次世代コンセプト　ＲＳＳ　ブログ　ＣＭＳ　Ajax　Web サービス　Web-API

７．ＣＭＳとは？
　コンテンツを簡単に作成でき掲載・削除が自動的におこなわれる　サイトデザインをリニューアルしてもコンテンツの変更不要　結果としてサイト管理者業務の軽減

８．ＫＯＳＭＯＳⅢに向けて
　慶應大学の特性や現状システムの問題点、国内パッケージの将来性への不安から海外パッケージを視野に

９．海外パッケージ調査　北米視察
　海外図書館システムにおける次世代図書館サービスとは？　電子資源関連システムと従来の図書館システムとの関係

10. 北米研究図書館協会メンバー館におけるパッケージ導入数
　Innovative　Interface 社の Millennium、Endeavor 社の Voyager などの導入館が多い

11. 電子資源関連システムの導入動向
　Digital Library System については Endeavor 社の ENCompass for Digital Collections が、Link　Resolver は Endeavor 社の LinkFinderPulus や Ex Liblis 社の SFX が売れている。MetasearchInterface は Ex Liblis 社の MetaLib や Follet 社の One

Search が、Content Management System では Endeavor の ENCompass が主流である。

12. 調査結果

①高度な図書館システムの背景　失敗の経験や豊富なＩＴスタッフの存在　②海外図書館システムの妥当性　完成度・運用実績・複雑な閲覧規則にも対応可　③電子資源関連システムの普及　ナビゲーションシステム、統合検索システム、電子管理システム、デジタル・リポジトリ・システム、学術情報ポータル・システムなど　④　統合認証基盤の整備・普及　学内統合認証システム、リモートアクセス機能、ポータルサービスなど

13. 調査結果のまとめ

利用者指向のサービス　来館と非来館双方のハイブリッドサービス、学術情報資源の一元的利用サービスやデジタル配信など

14. 実現へのポイント

ＣＭＳの積極的活用　ＲＳＳフィードの配信／　ワークフローの管理　利用者挙動の統計的把握　外部ＡＰＩの利用など

15. 課題

ポータルサイト運用体制の確立　利用者挙動調査　メンテナンス稼働の削減　予算の確保など

16. ＫＯＳＭＯＳⅢまでの主な作業項目

既にパッケージの選定のための RFP 作成に着手しており、価格交渉は済んでおり、今後機能要件定義書、カスタマイズ項目の洗い出し、データ移行仕様書の作成、動作検証、運用マニュアル作成などが残っている。

17. ＫＯＳＭＯＳⅢへの取り組みスタンス

パッケージはあまり手を加えずローカライズ・カスタマイズは必要最低限にする　利用者サービスの視点で考える

18. システムライブラリアン（ＳＬ）の危機と求められる SL 像とは

従来型のシステムだけに詳しい消極的なＳＬではなく、図書館サービス全体を見通し、最適なソリューションを提案できる次世代型ＳＬへ

19. SL の生き残りに向けて

技術力・コミュニケーション能力・先見性を持ち、情報収集・提案活動などを通じて自己の意識改革をしてゆくことが必要

20. モチベーション再考と必要とされるインセンテイブ

作業量の偏り・評価の不明確さなどのモチベーション低下要因をとり除き、仕事のやりがいと自発性を発揮させる。仕事は一人ではできない、自分の存在を認めてもらうことと同様に他人の存在も認めるチームワークが必要

21. リーダーシップ・コーチング

カルロスゴーンの現場主義に学ぶ（モチベーションの回復、徹底したコミュニケーション）　星野仙一に学ぶ（アメとムチ、暗示、目的意識の共有）　リーダーに必要な資質（よく聴き、的確な質問をし、葛藤をおそれず、十分な説明をし、相手を承認する）。

新しいシステムを導入するときは利用者中心に考え、カスタマイズは最小限にする。SL は利用者や現場スタッフのニーズを的確に汲み取り、プロトタイプを提供し、評価してもらうことによってよりよいシステム構築が可能になる。